The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	徽宗「瑞鶴図」の風景
Author(s)	深澤, 一幸
Citation	言語文化研究. 2013, 39, p. 95-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

徽宗「瑞鶴図」の風景

徽宗“瑞鶴圖”之風景

深　澤　一　幸

提要:本論文要探討的是北宋末期崇信道教，又在藝術方面也發揮出色能力的皇帝徽宗之統治下，瑞鶴這個道教吉祥，在道教氣氛濃厚彌滿的具體歷史局面，怎樣出現，怎樣接受。本論文的記述，主要以他畫的傑作「瑞鶴圖」為中心，儘量描寫徽宗的時代和他的書畫裏反映的道教與藝術的玄妙結合。

キーワード：徽宗，瑞鶴，茅山

1

北宋の終末に登場した徽宗（1082－1135）は，道教に心酔した皇帝として有名で，みずからを最高天たる神霄玉清府を統治していた長生大帝君の生まれ変わりと信じ，おのれは太霄帝君だと宣言し，臣下には「教主道君皇帝」と呼ぶようにさせた。また芸術家としても優れ，書も画も一流である。そのかれが絵画の才能を遺憾なく発揮した作品として，いまは中国・瀋陽の遼寧省博物館に収蔵される「瑞鶴図」巻がある。この絵は清朝のときは北京の故宮にあったのだが，ラストエンペラー溥儀の退出とともに故宮から長春にもたらされ，日本の敗戦による満州国の瓦解のとき散逸したが，変転のすえ博物館の有に帰したという。（図１）

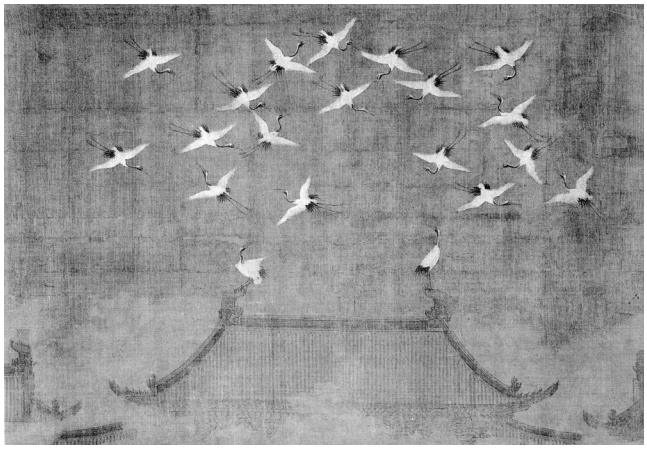

図１　徽宗皇帝「瑞鶴図」

この絵については，これを収録した『遼寧省博物館』（遼寧省博物館編，中国の博物館・第３巻，講談社，1982年３月）の「瑞鶴図」の説明をまず引くことにしよう。「徽宗趙佶　北宋。巻　絹本着色　縦52.0 cm，横148.7 cm」という体裁についての記述のあとに次のごとくいう。

宮廷正門の建築の上部を描いた着色の界画。正面に屋根と斗栱をあらわし，左右に屋根の一角がみえ，瑞雲がまつわりめぐって，その建築が空にそそり立っていることがわかる。青天に丹頂鶴18羽が飛び，２羽は鴟尾にとまっている。絵のあとに書かれた作者の題詩と題記は，制作のモティーフを説明して，政和２年〔1112〕正月15日夜，このような情景があり，祥瑞と感じ，そこでこれを描き，また詩に詠んだという。

徽宗趙佶は芸術にすぐれ，帝王の高貴な身にあって，しかも道教に心酔していた。およそ奇異な風物があれば，みな彼のとりあげる対象であった。南宋の鄧椿の『画継』には「宣和睿覧冊」の記載があり，〔彼が描いた〕図冊の数は千冊に達するというが，これはそのうちの一つである。『石渠宝笈』続編に著録されている。

鄧椿の『画継』巻一「徽宗皇帝」には，「其の後，太平の日久しく，諸福の物・致す可きの祥，湊(あつ)まりて虚日無く，史に書くこと絶えず，動物は則ち赤烏・白鵲・天鹿・文禽の属，禁籞に擾(さわ)ぎ，植物は則ち檜芝珠蓮・金柑駢竹・瓜花来禽の類，理(すじ)を連ね蔕(へた)を並べ，紀すに勝(た)う可からざるを以って，乃ち其の尤も異なる者凡(すべ)て十五種を取り，之を丹青に写(えが)き，亦た目して宣和睿覧冊と曰う」とある。

また清朝の内府が所蔵する歴代の書画を著録した『石渠宝笈』続編（乾隆五十八年編纂）の「御書房蔵一」には「宋徽宗瑞鶴図一巻」とあり，「本幅絹本。縦一尺六寸，横四尺二寸五分。色を設けて画(えが)くは，雲中に双闕あり，二鶴は鴟尾上に棲(と)まり，十八鶴は空中に盤舞す」と体裁を述べたあと，「瘦金にて書す」として，徽宗の題記・題詩を引く。そのあと「後幅」として明の禅僧の来復の題跋を引く。

この説明にもいう，絵のあとに書かれた徽宗自筆の瘦金体の題記をあげよう。（図２）

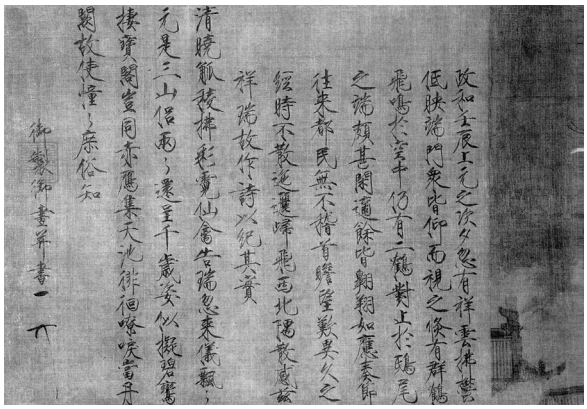

図２　徽宗皇帝「瑞鶴図」題記・題詩

政和壬辰上元の次夕，忽ち祥雲の払鬱として，端門に低映する有り。衆は皆な仰ぎて之を視るに，倏(たちま)ち群鶴の空中に飛鳴する有り。仍(な)お二鶴の，鴟尾の端に対止し，頗る甚はだ閑適なる有り。余は皆な翺翔し，奏節に応ずるが如し。往来する都民は，首を稽し瞻望し，歎異すること之を久しゅうせざるは無し。時を経るも散ぜず。迤邐として西北隅に帰飛して散ず。茲(こ)の祥瑞に感じ，故に詩を作り以って其の実を紀す。

「政和壬辰」政和二年（1112）の「上元」旧暦一月十五日，いわゆる元宵節の日，その「次夕」十六日の晩，とつぜん目出度い雲がもくもくと湧き上がり，宮殿の正門たる宣徳門に垂れこめてきた。民衆がみなこれを仰ぎ見ると，一群の鶴が空中を飛びまわり鳴きかわし，さらに二羽の鶴が屋根の鴟尾の両端にむきあってとまり，とてものんびりした風情である。ほかの鶴たちはみな空を飛翔し，リズムにあわせるかのよう。来あわせた首都の民衆は，みんなすわって頭を地につけ敬礼し遥拝し，ながい間感嘆していた。鶴たちは時間がたっても飛散しなかった。そのうち連なって西北のかなたに飛翔し散らばった。朕はこの瑞祥に感じいったので，詩を作って事実を記録しておく。

以下にはかれが作った題詩がくる。

清曉觚稜拂彩霓　清暁　觚稜は彩霓を払い
仙禽告瑞忽來儀　仙禽　瑞を告げて忽ち来儀す
飄飄元是三山侶　飄飄として元(もと)是れ三山の侶
兩兩還呈千歲姿　両両として還(ま)た呈す　千歲の姿
似擬碧鸞棲寶閣　碧鸞の宝閣に棲むに似擬し
豈同赤鴈集天池　豈(あ)に赤鴈の天池に集(つど)うに同じからんや
徘徊嘹唳當丹闕　徘徊し嘹唳して丹闕に当たり
故使憧憧庶俗知　故(ことさ)らに憧憧たる庶俗をして知ら使(し)む

今朝は宣徳門楼の屋根のとがり出た鴟尾に鮮やかな虹がかかっていたが，今夕は瑞祥のしるしたる仙界の鶴が突然挨拶にやってきた。ふわふわと風に舞い上がるさまはもとより仙境たる渤海中の三神山（蓬莱・方丈・瀛州）の仙鳥，対になって飛ぶさまはやはり千年の齢を保つ目出度いすがた。かの宝閣にすまう碧い鸞にそっくり，天池に集う赤い鴈と同じではないか。宣徳門の両脇の朶楼あたりをとびまわりクエークエーと鳴きかわすのは，わざと往来中の庶民たちに知らせようとしてのことだ。

「碧鸞」は唐の王勃の「廟山に遊ぶ賦」に「妙童と貞女とを懐い，青螭及び碧鸞を想う」とあり，「赤鴈」は『漢書』礼楽志に「赤鴈集い，六にして紛員たり。殊に翁雑として，五采の文」とあり，いずれも道教的な瑞鳥である。

そして最後には「御製，御画，并びに書」と書いて，「天下一人」の花押がある。

ここで画巻の「後幅」にしるされた題跋，明の僧たる来復（1319－1391），字は見心，豫章の人，の「蜀府は蔵する所の宣和瑞鶴図に題するを命ぜらる」詩（『蒲菴集』巻二，『御定歴代題画詩類』巻九十三）を参考までにあげよう。「蜀府」とは，洪武十一年（1378）蜀王に封ぜられたが，実際は二十三年まで中都（鳳陽府）に駐屯していた太祖十一子の朱椿である。来復の詩集『蒲菴集』の編集は洪武十二年なので，この詩は十一・十二年頃中都で作られたのだろう。

また，「瑞鶴図」は元では胡行簡の所蔵だったようだが、明ではまず朱椿の所蔵であり，その他の徽宗の絵画，たとえば「十八学士図」などもかれのもとにあったことが，詩題からわかる。

宣和道君天帝子　宣和道君は天帝の子
降靈下作長生主　霊を降ろし下りて長生の主と作る
風流不混世間塵　風流　混(まじ)らず　世間の塵に
清出冰壺湛秋宇　清きは氷壺より出で秋宇を湛(たた)う
前身雅是太霄君　前身は雅(もと)は是れ太霄君
金編玉策多奇勲　金編玉策　奇勲多し
感此仙禽四十翼　感ずらく　此の仙禽四十翼は
朝眞東度三山雲　真に朝せんと東のかた三山の雲を度(わた)る
低回不肯去　低回して去るを肯んぜず
舞雪依端門　雪を舞わせて端門に依る
長鳴若有訴　長鳴は訴え有るが若(ごと)く
飛聲徹崑崙　飛声は崑崙に徹す
是時道君振衣起　是の時　道君は衣を振るって起ち
遥聽鶴語通仙意　遙かに鶴語を聴きて仙意に通ず
濡毫爲寫青田眞　毫を濡らして為に写(えが)く　青田の真
龍香更灑親題字　龍香　更に灑(そそ)ぎて親しく字を題す
朱頂凝丹砂　朱頂は丹砂を凝らし
白羽吹霜袂　白羽は霜袂を吹く
内府珍蔵誰敢沽　内府の珍蔵　誰か敢えて沽(か)わん
大貝南金爛無比　大貝南金のごとく爛たること比無し
想當政和年　想う　政和の年に当たりて
善治談老荘　善く治め　老荘を談ず
遂令霞上仙　遂に霞上の仙をして
控鶴森翺翔　鶴を控え森として翺翔せしむ
一朝中原成永訣　一朝　中原　永訣を成し

五國城高臥風雪　五国　城高くして風雪に臥す
此時老鶴如可呼　此の時　老鶴　如(も)し呼ぶ可くんば
便欲騎之上天闕　便ち之に騎りて天闕に上らんと欲せしに

「毫を濡らして云々」の句は，徽宗が「瑞鶴図」を描いたことをいうが，「青田」は鶴の産地で，晋の「永嘉郡記」には「沐渓野有り，青田を去ること九里。中に一双の白鶴有り，年年子を生む。長大すれば便ち去り，只だ父母を余すのみ。精白にして愛す可く，多くは神仙の養う所と云う」とあり，北宋の文同の「李生の画ける鶴」詩にも「昂昂たる青田の姿，杳杳として軽素に在り。一身　万里の意，双目　九霄を顧みる」とある。

「竜香云々」の句は，徽宗が題記・題詩をしたためたことをいうが，「竜香」は端渓の硯で，北宋の何薳の『春渚紀聞』巻九「端渓龍香硯」に「臨汝の史君の黄莘任道の宝とする所なる龍香硯は，端渓の石也。史君は其の父孝綽，字は逸老と与(とも)に，皆な能書の名有り。故に文房に蓄うる所は，多く妙美に臻(いた)る。硯は深紫色，古斗の様。水を貯え磨濡する毎(ごと)に，之を久しゅうすれば則ち香気人を襲い，龍脳の如き者なり。先代の御府中の物と云う。任道既に終わるや，其の子の材は之を壙中に納む」とある。

終わりの「一朝」「五国」の一聯は，靖康二年（1127），徽宗が金兵の捕虜となり，「中原」の都を去って北に拉致され，その後「五国城」（今の黒竜江省依蘭）で死去したことをいう。

また，同じく明の英宗の大臣だった張寧（1426－1496），字は靖之，浙江海塩の人，も「宋の徽宗御製の瑞鶴に賡和せる詩」（『方洲集』巻十一）を作っている。

虎嘯龍吟發至和　虎嘯(うそぶ)き龍吟じて至和を発し
鳳儀鶴舞事如何　鳳儀し鶴舞う　事は如何(いか)ん
奎章彷彿賡歌意　奎章（明の英宗の唱和詩）は彷彿たり　賡歌（唱和）の意
只比當時美頌多　只だ当時（徽宗の題詩）に比べて美頌多し

この詩によれば，「瑞鶴図」は明では蜀王のもとから，英宗のときには，北京の宮廷に移っていたようだが，その後は民間の項元汴・呉彦良らを経て，清でまた宮廷にもどったようだ。

2

ところで元宵節の日は，本来晩には閉ざす城門を一晩中開放し，街じゅう灯篭をかかげ，さまざまなイベント，たとえば蹴鞠・綱渡り・棒登り・刀呑み・人形芝居・五代史語り・虫芸・猿廻し・八卦見・謎あてなど，が行われ，民衆は夜通し街を練り歩き，歌舞音曲などを楽しんだ。この政和二年，徽宗は三十一歳，帝位について十二年目である。北宋の首都たる東京の汴梁，

いまの河南省開封市での，その年の上元の元宵節については，明の洪楩の清平山堂刊「雨窗集」巻上に収める「戒指児記」の内容をやや節略した明代の馮夢龍が編集した『古今小説』巻四の，宋人の作とされる小説「間雲菴にて阮三は冤債を償う」に記述がある。

時は正（政）和二年上元の令節に値(あ)い，国家（天子たる徽宗）は旨有りて元宵を慶賞せしむ。五鳳楼（西京洛陽の宮城の正門）の前には鰲山（元宵節で灯火を燃やす五彩のやぐら）一座を架起し，地に満つ華燈，天に喧びすしき鑼鼓。正月初五日自り起(はじ)め，二十日に至りて止む。禁城は閉ざさず，国家は民と楽を同じゅうす。怎(いか)でか見得たる。隻(ひとつ)の詞児有りて，瑞鶴仙と名づけ，単(ひた)すら上元の佳景を道着す。

ここで引かれる「詞児」は，南宋の高宗・孝宗のころに活躍し，秦桧門下十客の一人となり，軍器監丞などの官についた康与之の，「瑞鶴仙」のメロディーにのせて「上元応制」かれが側近くにはべった高宗の命により上元のにぎやかさを寿いだ詞（「全宋詞」第二冊，頁1304）であり，小説にいうような北宋の徽宗時代の上元をうたうものではない。

瑞煙浮禁苑	瑞煙は禁苑に浮かぶ
正絳闕春回	正に絳闕に春は回(かえ)り
新正方半	新正は方(まさ)に半ばなり
冰輪桂華滿	氷輪　桂華満つ
溢花衢歌市	花衢歌市に溢れて
芙蓉開遍	芙蓉は開くこと遍し
龍樓兩觀	龍楼の両観
見銀燭	見る　銀燭と
星毬有爛	星毬の爛たる有るを
捲珠簾	珠簾を捲き
盡日笙歌	日を尽くして笙歌し
盛集寶釵金釧	盛んに宝釵金釧を集む

堪羨	羨むに堪えたり
綺羅叢裏	綺羅の叢の裏(うち)
蘭麝香中	蘭麝の香の中
正宜遊翫	正に宜しく遊翫すべし
風柔夜暖	風柔らかに夜暖かし
花影亂	花影は乱れ

笑聲喧　　笑声は喧びすし
鬧蛾兒滿路　鬧蛾児は路に満ち
成團打塊　　団と成り塊と打(な)り
簇著冠兒鬪轉　冠児に簇著し鬪転す
喜皇都　　喜ぶ　皇都の
舊日風光　　旧日の風光
太平再見　　太平の再び見(あらわ)れしことを

「龍楼両観」は，じっさいは南宋の都たる臨安，いまの杭州，の大内の正門たる麗正門や大慶殿などをいうはずだが，うらには「皇都の旧日の風光」滅び去った徽宗の汴京の「龍楼」宣徳門楼とその「両」側につきでた「観」朶楼のイメージがあろう。いまの北京・故宮の午門と同じ構造である。「星毬」は，元宵節のとき京城中の諸営・班・院が長い竹竿で中空にかかげた丸い灯篭。遠近高低さまざまにうごき，まるで流星のようだった。「鬧蛾児」は，元宵節の飾り物。烏金紙を飛蛾のかたちに剪り，五六個を一つに束ね，針を柄にして，婦女たちが頭髪に挿した。「冠児」は，婦女たちのかぶる冠で，大体は漆紗でつくり，金銀珠翠・彩色した造花で飾った。末句の「太平再見」は，杭州に遷都した南宋がかつての北宋の太平を再び取り戻した，として，高宗の統治を持ち上げている。

さてこの長短句をおりまぜた康の「詞」には，鶴は歌われないが，道教的な歓楽の気分が感じられ，メロディーを表す詞牌「瑞鶴仙」は，どうやら徽宗の瑞祥と関係するようである。

この詞牌「瑞鶴仙」は，北宋では中期の黄庭堅（1045－1105）と末期の周邦彦（1056－1121）の二人だけが使うが，いずれも徽宗の治世にからむだろう。ところで『詩人玉屑』巻二十一「詩余」の「山谷は酔翁亭記を檃括す」（「風雅遺音」による）によれば，「山谷は其の詞を檃括し，合するに声律を以ってし，瑞鶴仙を作りて云う」とあって，黄は鶴に関係しないものの「瑞鶴仙」を作っているようだが，南宋の王明清の『玉照新志』巻二は，おそらく周邦彦を創始者とみなして，周の晩年の「待制を以って提挙南京鴻慶宮たり，杭（州）自り徙(うつ)りて睦州に居る。夢中に長短句の「瑞鶴仙」一闋を作る。既に覚むれば，猶お能く全て記すも，了(つい)に其の謂う所を詳びらかにせざる也」という不思議な故事をあげている。これによれば，周のこの「瑞鶴仙」は徽宗の宣和二年（1120）十月ごろの睦州での作となる。

悄郊園帶郭　　悄(さびし)くも郊園は郭を帯び
行路永　　行路永し
客去車塵漠漠　客去りて車塵は漠漠たり
斜陽映山落　　斜陽は山に映じて落つ
斂餘紅　　余紅を斂(おさ)め

猶戀孤城闌角　猶お孤城の闌（干の）角を恋う
凌波歩弱　　波を凌ぐ歩みは弱し
過短亭　　短亭を過ぎ
何用素約　　何ぞ素（もと）の約を用いん
有流鶯勸我　　流鶯の我れに勧むる有り
重解繡鞍　　重ねて繡鞍を解き
緩引春酌　　緩（ゆる）く春酌を引けと

不記歸時早暮　記せず　帰時の早（あさ）なるや暮なるや
上馬誰扶　　馬に上るに誰か扶（たす）けしや
醒眠朱閣　　朱閣に醒めしや眠りしや
驚飆動幕　　驚飆は幕を動かす
扶殘醉　　残酔を扶け
繞紅藥　　紅薬を繞（めぐ）る
歎西園　　歎く　西園は
已是花深無地　已に是れ花深くして地無きに
東風何事又惡　東風は何事ぞ又た悪し
任流光過却　　流光の過却するに任（まか）せ
猶喜洞天自樂　猶お洞天に自から楽しむを喜ばん

この詞は，かれが昨日客人を見送ったあとの心情を追懐するようだが，たしかに「謂う所」はよくわからず，また瑞鶴もあらわれない。しかし不思議なことに，この詞の内容はここ睦州（いまの浙江省建徳市の東）から南京・応天府（いまの河南省商丘市）にむかう周邦彦の，方蝋の乱に遭遇したり，南京の鴻慶宮で死去するなどの未来にぴったり一致しているのだと，王明清は解説する。また神仙の住まう「洞天」ともいえる鴻慶宮がからむことからみて，「瑞鶴仙」は徽宗の道教的気分のなかでこそ生まれたのだとしてよかろう。

つぎは徽宗時代の汴京の元宵節をきわめて詳細に記述した孟元老の『東京夢華録』巻六から，鶴の瑞祥があらわれた年とは別の年の「十六日」を入矢義高先生の訳文（東洋文庫598, 平凡社, 1996年３月）であげよう。

十六日には出御あそばされず，御朝食を済まされると，宣徳門にお上りになる。音楽が奏されると，御座の簾が巻き上げられ，庇のきわで庶民に観覧お差し許しの御沙汰が出る。そこでまっさきに楼門の下へ駆けつけたものは，うまく天顔を拝するのに間にあう。天子は小帽と紅袍を召され，卓子がただ一つあって，左右には近侍の官が，簾の外には日蓋い傘と掌

扇をもった近習がいる。程なく簾が下りると，音楽が奏され，庶民は自由に観覧が差し許される。

両方の朶楼が向いあっているうち，左の楼上の向いには鄆王（名は楷。徽宗の次子）以下の控える装い立てた幕次（テント張りの控え），右の楼上の向いには蔡太師以下，執政やその外戚の人たちの幕次が設けられ，時おり楼上から金色の鳳が，これらの幕次に飛び下りて来て，つぎつぎと賜わり物を下される。各幕次の中では，お抱えの歌妓がはやりの唄を競演し，それと山棚や露台の上下とで，沸きたつような楽の音である。西の朶楼の下では，開封府の長官の査察する幕次があり，前に罪人をずらりと並べ，ときおり断罪をやって，愚民への戒めとするが，楼上から時に御沙汰が下り，特に赦免せしめられることがある。

やがて豪華な灯火や炬火がともされ，月影と花の色と，おぼろに霞わたり，おちこちに燭光がゆらめく。三更（午前零時ごろ）になると，楼上から小さな紅紗の灯毬が，綱につるして中空にさし出される。すると市民にはみな天子の御還幸だとわかる。たちまち楼外に鞭を鳴らす音が聞こえると，山楼の上と下，数十万の灯燭が，一どきに消える。そこで貴人の車馬は，ことごとく大内の前から目白押しに南行して，相国寺に遊びにゆく。

「蔡太師」とあるのは蔡京で，かれが太師となって東京に召還されたのは政和二年である。「時おり金色の鳳が，云々」というところ，『新刊宣和遺事』前集「罷燈夕之楽」では，「宣和六年正月十四日夜，大内門を去り直上せる条の紅綿の縄の上より，一箇の仙鶴児が飛び下り来たり，口内に一道の詔書を銜（くわ）う」と，同様に描写する。ここで仙鶴が登場することには，注意すべきだろう。

さらに，この記述によれば，徽宗は一月十六日は基本的に朝から晩の三更までずっと宣徳門の楼上ですごすわけで，二十羽の仙鶴が宣徳門をめがけて「来儀」したのは，明らかに徽宗と感応したことになろう。それゆえに，徽宗は題記・題詩で「その実を紀」し，図巻でもって「その実」を描くことができたのである。

さて，ここまで上元，一月十五日をめぐる状況を述べてきたわけだが，「上元」とはもともと道教の三元から来ているもので，『大唐六典』巻四「祠部郎中」には「三元斎は，正月十五日天官を上元と為し，七月十五日地官を中元と為し，十月十五日水官を下元と為し，皆な法身自から愆罪を懺（く）ゆ」とあり，清の趙翼の『陔余叢考』巻三十五にも「其れ正月・七月・十月の望（十五日）を以って三元日と為すは，則ち元魏（北魏）自（よ）り始む」とある。

そして，『東京夢華録』巻六にいうごとく，元宵節の行事として，一月「十四日，車駕は五嶽観に幸す」，徽宗はまず泰山・華山・霍山・恒山・嵩山の五嶽の神を祀った朱雀門外の五嶽観に行幸し，さらに「十五日，駕は上清宮に詣（いた）る」，民福を祈るために建てられた新宋門内の上清儲祥宮に参詣した。この二所は，どちらも道教の宮観である。

3

ここで徽宗の南宋から中唐にさかのぼって，当時の地方長官をつとめた崔玄亮の感応を確認したい。わたしはさきに「崔玄亮の道教生活」(『三教交渉論叢続編』京都大学人文科学研究所，2011年3月）と題する論文で，かれの生活にみられる道教の反映を詳細に検討したが，ここでとりあげるのは，かれが湖州刺史として毎歳，道教の斎醮をとりおこなったときに出現した仙鶴たちとの感応である。いま友人の一人だった白居易の「唐の故の虢州刺史にして礼部尚書を贈られし崔公の墓誌銘」から関係する部分を引こう。

湖（州）に在ること三歳，歳ごとに三元道斎を修するに，輒(すなわ)ち彩雲・霊鶴有り，壇上を迴翔し，之を久しゅうして去る。前後に斎を致すこと七八にして，鶴の来儀する者は凡て三百六十，其の内に修め外に感ぜしむる也(やか)此くの如し，大道に通ずと謂わざる可(べ)けん乎(や)。

崔玄亮は唐の地方長官，徽宗は北宋の皇帝と，その地位は隔絶し，また感応の場所もこちらは湖州の紫極宮，あちらは首都の宮城の正門と異なるものの，ここにあらわれた仙鶴たちの「来儀」のさまの相似には，驚くばかりである。それはこの墓誌と徽宗の「瑞鶴図」題記・題詩をみくらべれば，より明らかになる。「彩雲」は題記の「祥雲」に，「霊鶴」は題詩の「仙禽」に，「迴翔」は題記の「翺翔」に，「之を久しゅうして去る」は題記の「時を経るも散ぜず」に対応するだろう。

この相似はもちろん，崔は三元道斎など道教の祭儀をとりおこない，徽宗も上元という道教理念のもとにある元宵節の行事をおこなったという類似から来たものだろう。しかしより根本的なのは，両者に共通する道教への深い信仰である。

徽宗の治世には，たびたび仙鶴の瑞祥が出現する。『宋史』儀衛志六「鹵簿儀服」によれば，元符二年（1099），徽宗が即位したときに，兵部侍郎の黄裳はこう奏上した。

「南郊の大駕の諸旗名物は，典故を用いて号を制するを除く外は，余りは時事に因りて名を取る。伏して見るに近ごろ者(は)，（陛下は）璽もて元符（天子の位）を授けられ，茅山の上の日には重輪有り，太上老君の眉間は紅光を発し，武夷君廟には仙鶴有り。臣請うらく制して旗号と為し，宝符と曰い，重輪と曰い，祥光と曰い，瑞鶴と曰わんことを。」

そしてこの武夷君廟で仙鶴が詔を迎えた瑞祥をことほいで，徽宗は

政和二年，延福宮にて輔臣を宴するに，群鶴の西北自り来たり，睿謨殿上に盤旋する有り。

大晟楽を奏するに及びて，翔鶴は屢しば至り，詔して瑞鶴の旗を制せしむ。

ということになった。
また『宋史』五行志二下によれば，

政和三年（1113）九月，大いに明堂に饗するに，鶴の堂上に回翔する有り。明日，又た上清宮に翔ける。是の時，所在に瑞鶴を言い，宰臣等の表賀することは紀すに勝う可からず。

これにつづいて，『宋史全文』巻十四「宋徽宗」の政和三年にはいう，

冬十月，劉恢言う，「今月四日，宰執は学に赴き，両学生の習う所の大晟雅楽を按試す。第二章に至り，曲の未まだ終わらざるに，仙鶴四の南自り来る有り，盤旋して宮架の上を飛舞し，徘徊して下らんと欲す。衆人は歓呼す。遂に表北由りして去る。乞う史館に宣付せんことを」と。之に従う。

同じく，政和六年にはいう，

四月，提挙上清宝籙宮の蔡攸が奏すらく，「今月二日，皇帝が宮に詣り千道民大会を設くるに，羽鶴の始青・天祥両殿の間に来翔する有り」と。

十一月・・・太師の蔡京等言う，「伏して見るに，・・・鄆州には仙鶴約二百隻の飛鳴する有り」と。

同じく，政和七年にはいう，

両浙の道士林霊素は京師に至る。二月，上清宝籙宮に御され，通真先生林霊素に命じて「道経」及び「玉清神霄王降生記」を講ぜしむるに，翔鶴数十の飛鳴して之を久しゅうする有り。

この林の講義は，いわゆる「神霄説」で，最高天たる神霄を統治していた玉清神霄王はその治を弟の青華帝君に譲って世に降りた。これが徽宗である。林もこの仙府の仙卿だったが，玉清王を補佐するため世に下った。その他当時の要人たちは，みなこの仙府の卿吏である，といった内容。

また，王明清の『揮麈余話』巻一では，徽宗と蔡京が唱和しあった真跡と称する詩軸を紹介するが，そこには「上清宝籙宮にて立冬の日に経を講ぜしの次，羽鶴数千の空際に飛翔する有

り。公卿士庶は，衆目もて仰ぎ瞻(み)る。卿は時に栄観に預かり，詩を作り実を紀して来たり上(たてま)つる。因りて俯して其の韻に同じ，太師以下に賜う」と題する詩をのせる。はじめに詩を作った「卿」そなたも「太師」も蔡京で，おそらく宣和年間の作だろう。それをあげれば，

上清講席鬱蕭台　上清の講席　蕭台鬱たり
俄有青田萬侶來　俄かに青田の万侶の来たる有り
蔽翳晴空疑雪舞　晴空を蔽翳するは雪の舞うかと疑い
低徊轉影類雲開　低徊して影を転ずるは雲の開くに類す
翻翰清唳遥相續　翰(はね)を翻し清唳して遥かに相い続き
應瑞疑時尚不回　瑞に応じて時を疑い尚お回(かえ)らず
歸美一章歌盛事　（そなたが）帰美（賛美）せる一章は盛事（仙鶴の瑞祥）を歌い
喜今重見謫仙才　喜ぶ　今重ねて謫仙の才を見るを

末句の「謫仙」とは，天上世界から罪によって地上の人間界に流された仙人で，唐代の道教詩人の李白を指すが，いまのそなた蔡京の詩才を見るとまるでかの李白の再来のようだ，と持ち上げている。

また宣和元年（1119）の，徽宗の「己亥十一月十三日，南郊に天を祭る斎宮の即事，太師に賜う」と題する七言律詩のあとに，太師の蔡京が唱和した「御制になる己亥十一月十三日南郊にて天を祭る斎宮の即事の賜りし詩に恭和す」る詩をのせるが，そこには

照地神光臨午陛　地を照らす神光は午陛に臨み
鳴皋仙羽下重簷　皋（奥深い沢）に鳴く仙羽は重簷に下る

という一聯があり，下句の「鳴皋」は「詩経・小雅・鶴鳴」に「鶴は九皋に鳴き，声は野に聞こゆ」「鶴は九皋に鳴き，声は天に聞こゆ」とあるごとく，鶴の「仙羽」が天から下りたことをいう。それに徽宗が唱和した「清廟斎幄，（朕は）常に詩の太師に賜う有り，（そなたは）已に曾(か)つて和して進む。禋祀の礼成り，（そなたは）目撃の事を以って前韻に依りて再び進む。（朕は）今亦た元韻を用いて復(ま)た太師に賜う。特に此れを以って相い困しましむのみには非ず。蓋し清時の君臣は賡載（詩の唱和）も亦た一時の盛事なる耳」と題する詩にも

聯翩玉羽層霄下　聯翩たる玉羽は層霄より下り
烜赫神光愛景暹　烜赫たる神光は愛景暹(のぼ)る

とあり，上句には鶴を連想させる「玉羽」をつかう。

また，王安中（1076－1134），字は履道，中山陽曲の人は，『宋史』王安中伝に「政和の間，天下は争いて瑞応を言い，廷臣は輒ち表を箋して賀す。徽宗は作る所を観，称して奇才と為す」とあるごとく，表を献上して瑞祥を慶賀したので，徽宗に賞識され，秘書少監から中書舎人に抜擢され，御史中丞に除せられたのである。そのかれが献上した表には，瑞鶴を寿いだ「甘露翔鶴を賀する表」「開封府の翔鶴を賀する表」「宝籙宮の翔鶴を賀する表」「翔鶴竹木を賀する表」（いずれも『初寮集』巻五）などがある。いまは「瑞鶴図」を彷彿させ，徽宗と蔡京が立冬の日に詩の唱和をした上清「宝籙宮の翔鶴を賀する表」をあげよう。

臣某等言う，日馭は天に臨み，霓裾の万衆を列ね，皐禽（瑞鶴）は雲に舞い，金闕（宝籙宮）の千尋に来たる。凡そ見聞に逮べば，率ね忤蹈を同じゅうす。中は賀す。

恭しく惟えらく，皇帝陛下は幾を物祖（万物の祖）に研め，妙を道枢に観る。躬は既に聖にして知る可からず，徳は天の大奉する所と為す。夙に帝訓を膺けて，真風を崇護し，乃ち紫垣に附して，琳宇を肇新す。明馨玄酒は，肸蠁（霊気）を叢霄に通し，宝剤霊符は，呻吟を比屋に起こす。異人（すぐれた人物）は間ま出で，上帝は居りて（のんびりと）歆く。親しく至尊を屈げ，往きて広会（大都会）に陳ぶ。宜なるかな飈遊（飄飄と遊ぶ神霊）の降集し，羽鶴を驂とし以って徘徊するは。蓋し高真（老子）の衆妙の心は，一徳（徽宗の徳）に眷りみ，久視長生の類に託して，介するに万年を以ってせしならん。

臣は幸いにも熙辰に遇い，具さに栄渥を叨りにす。天自り祐くる也，幸いに感格の誠を観る。其の子は之に和す，敢えて対揚の義を怠らんや。（「易経」中孚に「九二，鳴鶴は陰に在り，其の子は之に和す。我れに好爵有り，吾れ爾と之を靡たん」とある）臣は任うる無し。

中段で強調するのは，この「羽鶴」が飛来した瑞祥は，「皇帝陛下」徽宗が「道枢」道教の奥義を我がものとし，「真風」道教の風潮を擁護したその徳によって，引き起こされたのだということである。

また晁説之は「上元の前，再び南荘の壁に題す」（『景迂生集』巻八）詩で「難を弭むに九州は宜しく鼎を祭るべし，慶雲翔鶴は声詩を誤る」とうたい，李新は「三瑞堂の記」（『跨鼇集』巻十六）で「慶雲翔鶴は，天宇に上下し，嘉禾異花は，地軸に陸離たり」とのべて，いずれも徽宗のめでたい御代を「慶雲翔鶴」で象徴する。

また傅察は政和四年の「西封を擬請する頌」（『忠粛集』巻上）で「霊芝嘉禾，文石析木の異，甘露醴泉，景星翔鶴の応」をあげて，「翔鶴」を忘れない。

そして，これら瑞祥を記録した書物も編纂されたようで，白時中，字は蒙亨，寿春の人，は，『宋史』白時中伝には「政和六年，尚書右丞・中書門下侍郎を拝す。宣和六年，特進・太宰兼門下に除せられ，崇国公に封ぜられ，慶国に進む」とある後，かくいう。

始め，時中は嘗つて春官（礼部尚書）と為り，（徽宗は）詔して天下の奏する所の祥瑞を編類せしめ，其の文字の能く尽す所の者に非ざる有れば，図絵し以って進ましむ。時中は「政和瑞応記」及び「賛」を進む。宣和六年，太宰と為るに及びて，表もて翔鶴・霞光等の事を賀す。

「翔鶴」についても詳細に記録したはずのこの『政和瑞応記』は，『宋史』芸文史などにも著録されず，いまは伝わっていないようである。

4

ここからは，徽宗と道教儀礼について注目したい。まず北宋の張商英（『宋史』張商英伝によれば，字は天覚，蜀州新津の人）が，道教を信奉した三代皇帝，太宗・真宗・徽宗の作になる道教の斎醮において詠唱される歌詞をあつめた『金籙斎三洞讃詠儀』（『道蔵』洞真部讃頌類）の巻下は，徽宗の作をあつめるが，そこには「白鶴詞」十首が収められている。その中には「瑞鶴図」の情景を彷彿させる歌もある。いまは第三・四・八首をあげてみよう。

靈鶴翩翩下太清　霊鶴は翩翩として太清より下り
玉樓金殿曉風輕　玉楼　金殿　暁風軽し
昂昂不與雞爲侶　昂昂として雞と侶を為さず
時作沖天物外聲　時に作(な)す　天に沖する物外の声

三山碧海路非遥　三山　碧海　路は遥かなるに非ず
來瑞清都下紫霄　来たりて清都に瑞あり紫霄より下る
霜雪羽毛冰玉性　霜雪のごとき羽毛　氷玉のごとき性
瑶池深處啄靈苗　瑶池の深き処に霊苗を啄(ついば)む

白毛鮮潔映霜華　白毛は鮮潔にして霜華に映じ
丹頂分明奪絳紗　丹頂は分明にして絳紗を奪う
千六百年神氣就　千六百年　神気就(な)り
飛鳴長伴玉仙家　飛鳴して長(とこ)しえに伴(ともな)う　玉仙の家

また，やはり道教儀礼で演奏する歌曲をあつめた『玉音法事』（『道蔵』洞玄部讃頌類）の巻下「宣和続降」に収める徽宗の「歩虚詞」二首には「後の一首は「御注道徳経」を講ずるに，仙鶴の翔集するに因りて作る」という注がついている。つまり，徽宗がおのれの注釈をつけた『老子』五千言（『宋徽宗御解道徳真経』四巻で，『道蔵』洞神部玉訣類に収む）を講義したところ，

多数の仙鶴が飛んで集まってきたのである。その有様を詠じた後の一首をあげよう。

高眞明道德　高真（老子）は道徳を明らめ
垂世五千言　世に垂る　五千言
解釋慙涼薄　（朕の）解釈は涼薄なるを慙ずるも
殫誠測妙元　誠を殫くして妙元を測る
霓旌嚴教典　霓旌（皇帝の儀仗たる，五色の羽毛を綴った旗）　教典厳そかに
羽唱徹雲軿　羽唱は雲軿（天空を往来する，神仙が乗る雲の車）に徹す
瑞鶴儀空際　瑞鶴は空際に儀し
祥風拂暑煩　祥風は暑煩を払う
穹窿茲響應　穹窿　茲こに響応し
寶祚億斯年　宝祚　億の斯の年までにせん

末句は「詩経・大雅・下武」に「茲の来たりて許むを昭らかにし，其の祖の武を繩しむ。於あ万の斯の年までにして，天の祜いを受けん。天の祜いを受け，四方より来賀す。於あ万の斯の年までにして，佐け有るに遐うせず」とあるのにもとづく。

さて，徽宗と仙鶴たちとの感応において，じつはかなり重要な役目をはたしたと思われるのは，道教の聖地たる茅山である。さきにあげた元符二年，徽宗の即位にあたって黄裳が奏上した四つの瑞祥のなかでも，「武夷君廟に仙鶴有り」とならんで，「茅山の上，日に重輪有り」があがっていた。そしてわたしの論文「崔玄亮の道教生活」においても，崔のもとに群鶴が「来儀」したのは，近くの茅山に関係するだろうとの推測を述べておいた。

茅山と鶴との因縁は古く，たとえば唐の柳識の「茅山白鶴廟の記」（『文苑英華』巻八一五）には

漢の元帝の世に，茅君有り，道徳を積み襲ね，来たり仙任を受け，内に遊び外を統べ，沢は幽・顕に加わる。邦人は瞻戴し，因りて改めて茅山と為す。玄教は既に溥ねく，二弟も亦た此の山にて道を得たり。三峯は是れ三君の雲鶴を駐せしの所。備さに伝記に詳し。

とあるが，とくに徽宗の代になって，その結びつきはより強固になったように思われる。たとえば，元の劉大彬の編になる『茅山志』巻二十六「録金石編」に収める「洞陽館の記」の前半にはいう，

宣和間（1119－1125，徽宗の治世），道士の沈洞元（1070－1131，『茅山志』巻十六「采真遊篇」によれば，名は若済，字は子舟，銭唐の人）は大薬を錬り，人は其の医の神なるを知る而已。

侍郎の王公漢之（『宋史』王漢之伝によれば，字は彦昭，衢州常山の人。年七十にして卒す）は金陵に帥たり，人の為に地を択び，迺(すなわ)ち華陽の南・四平の北に之(ゆ)きて館舎を修築す。旧に仍(よ)り号して洞陽と曰い，并びに其の先世を祀る。蓋し道書は洞陽を称して朱陵が昇度せしの館と為す。又た洞府の陽に拠るを以ってして名づく。

思陵（南宋の高宗）は御に在りしとき，歳ごとに使いを清真観に遣(や)り，万道斎を建てしむ。斎の時は，群鶴が翔けり集まる。蓋し三月十八日を鶴会と称するは，此れに始まる。

淳熙の初め（1174），洞元の徒は，皆な遠游す。弐車の王光国（王漢之の息子）は克(よ)く先志を承けつぎ，地の為に人を択ぶ。道者の王介叔は草衣木食，天市壇を主どるに，邀致されて洞陽に来たる。介叔の徒の丁道存と曰うもの，相い与(とも)に志を道業に刻む。四方の士を招来するに，鶴会の盛んなるは，既に前代の賜予無く，清真（観）に在らずして洞陽（観）に在り。

これによれば，やはり徽宗の時代の道士沈洞元，そして三茅君が年に一度降臨する三月十八日に建てる万道斎をきっかけとして，「群鶴が翔集」する「鶴会」が生まれたことがわかる。さらに『茅山志』巻十七「楼観部篇」の「清真観」には，「鶴会」についてかくいう。

清真観は，大羅源に在り。政和中（1111－1117，徽宗の治世），道人の呉徳清は庵を結び，以って雲水の衆を待つ。徽宗は賜うに観額を以ってす。毎歳の三月十八日，四方の道人は畢(ことごと)く集まり，茅君に礼謁す。斎時には多く白鶴の翔り遶(めぐ)る有り。因りて伝えて鶴会と謂う。

ここでも三茅君の斎をきっかけとして，「白鶴の翔遶」する瑞祥を述べている。

また，『茅山志』巻二十五「録金石篇」にのせる，張商英の撰になる「江寧府の茅山の崇禧観碑銘」には次のような一段がある。

越えて明年（哲宗の紹聖三年，1096）五月，玉皇殿成る。奉安の日，双つの白鶴の終日徊翔し，其の上に遶り唳(な)く有り。是こに於いて上清大洞法師の劉混康は，其の籙を授けし弟子の与(ため)に曰わく，「異時の白鶴は，常に三月十八日を以って来集す。或いは有り或いは無く，亦た常ならざる也。今殿成りて鶴降る。何公（紹聖三年十月八日に立てられたこの碑陰によれば，朝奉郎，充宝文閣待制，知江寧府軍府事，充江南東路兵馬鈐轄の何正臣。『宋史』何正臣伝によれば，字は君表，臨江新淦の人）の崇敬の誠が，黙して真と契るに非ずんば，其れ何を以って此の祥を召かんや。請う（何）公の像を別室に絵がき，以って我が邦人の思いを永くせんことを」と。

ここで登場する劉混康（1036－1108）は，道教茅山派の第二十五代宗師である。紹聖元年には哲宗から「洞元通妙大師」の号を賜り，この時，紹聖三年には，茅山で玉皇殿の竣工を目に

していただろう。そのかれが何正臣の肖像を懇願した「授籙せる弟子」とは，未詳だが，あるいは哲宗か。

ところで哲宗に劣らず，徽宗は劉と特別ともいえる深い関係があり，即位するとすぐにかれを都に召し出し，以後，一貫してかれを重用した。崇寧二年にはかれに「葆真観妙先生」といった号も賜った。また哲宗の紹聖四年にかれの住まいと定められた茅山の元符観が崇寧五年（1106）に落成すると，徽宗はみずから「元符万寧宮」と額に題し，「九老仙都君」の玉印などを賜った。また政和七年（1117）には，宮城の東北隅をもっと高くすれば世継の男子が多く生まれるという劉の元符三年（1100）の進言をいれて，宮城外の上清宝籙宮の東に全周十余里，最高峰九十歩という巨大な艮嶽を造営したりした。裏から見れば，劉混康は徽宗との密接な関係によって，その庇護のもとに茅山の教団を大いに発展させたともいえよう。

そして，『茅山志』巻十一「上清品」の「二十五代宗師葆真観妙沖和先生」伝には，劉混康が茅山を出て都で死去する年のこととして，鶴に関係した故事を記す。

> 大観二年（1108），召しに赴き山を出づるに，群鹿は道を遮ぎる。師は意を以って之に喩（さと）すに，一鹿は車に触れて斃（たお）れ，之を道左に瘞（うず）む。是れに先んじて，畜うる所の鶴は召しを聞きて飛び去る。師曰わく，「鶴は去り鹿は斃る。吾れは還る期無からん」と。

茅山崇禧観の玉皇殿が落成したときに飛来した二羽の白鶴は，劉混康と哲宗を結びつけ，ひいては徽宗をも結びつけるものとしてよいだろう。

5

さて，徽宗は「瑞鶴図」のほかにも，二十羽の仙鶴を描いた図を残している。それは，ほぼ同時期に描いた「筠荘縦鶴図」である。『画継』巻一「徽宗皇帝」にはいう，

> 政和の初め（1111），嘗つて仙禽の形を写（えが）き，凡て二十，題して「筠荘に鶴を縦（はな）つ図」と曰う。或いは上林に戯れ，或いは太液に飲む。鳳翔けり龍躍るの形，露に警（そな）え風に舞うの態，吭（のど）を引き天に唳（な）き以って其の思いを極め，羽を清泉に刷（は）き以って其の潔ぎよさを致す。並立して争わず，独行して倚（よ）らず。閒暇の格，清迥の姿は，縑素の上に寓す。各おの其の妙を極めて，同じ者有る莫し。

この図は現存しないようだが，大体の有り様は推測できる。ところで，これは五代の黄筌（？―965）の「六鶴図」壁画を参考にしたらしい。いま北宋の郭若虚の『図画見聞志』巻二「五代」の黄筌の条を引く。

黄筌，字は要叔，成都の人。十七歳，王蜀の後主（王衍）に事えて待詔と為る。孟蜀に至りて検校少府監を加えられ，金紫を賜わる。後に如京副使に累遷す。花竹翎毛を画くを善くし，兼ねて仏道人物山川竜水に工みなり。全く六法を該ね，遠く三師〔花鳥の師は刁処士，山水の師は李昇，人物龍水の師は孫遇也〕に過ぐる也。

孟蜀の後主（孟昶）の広政甲辰の歳（七年，944）に，淮南より聘を馳せ，副うるに六鶴を以ってす。蜀主は遂に筌に命じ，六鶴を便坐の壁に写かしめ，因りて六鶴殿と名づく〔蜀人は此れ自り方めて真鶴を識る。六鶴の集いは「故事拾遺」巻中に在り〕。是れ由り蜀の豪貴の図軸を為らんと請う者は蹟を接す。時に諺して「黄筌が鶴を画き，薛稷は価を減らす」と云う。

終わりのことわざについては，宋の黄休復の『益州名画録』巻上「黄筌」に「是れに先んじて，蜀人は未まだ曾つて生鶴を見るを得ず，皆な薛少保の画鶴を伝えて奇と為す。筌が此の鶴を写きしの後，貴族豪家は競いて厚礼を将って鶴図を画くを請い，少保は此れ自り声漸く減れり」とある。

ところで，「六鶴」の具体的な様については，さきの注に「故事拾遺」をあげていたごとく，『図画見聞志』巻五「故事拾遺」の「鶴画」にいう，

黄筌は六鶴を写く。其の一は「天に唳く」と曰う〔首を挙げ喙しを張りて鳴く〕。其の二は「露に警う」と曰う〔首を回し頸を引きて望む〕。其の三は「苔を啄む」と曰う〔首を垂れ下のかた地に啄む〕。其の四は「風に舞う」と曰う〔風に乗り翼を振るいて舞う〕。其の五は「翎を疏く」と曰う〔項を転じて其の翎羽を毓う〕。其の六は「歩みを顧みる」と曰う〔行きて首を回し下顧す〕。後輩の丹青すれば，則ち之に象どる。杜甫の詩に「薛公の十一鶴，皆な青田の真を写く」と称するも，恨むらくは十一の勢い復た何如んなるかを見ざる也。

後輩の画家はみなこの六鶴を手本にするというごとく，先の徽宗の「縦鶴図」の「露に警え風に舞う」「吭を引き天に唳く」「羽を清泉に刷く」すがたは，其の二・四・一・五にもとづいている。

さらに，宣和庚子（二年，1120）ごろの徽宗朝の内府所蔵の絵画を記録した『宣和画譜』巻十六「花鳥二」の「黄筌」の条では，その資承について「筌は諸家の善を資りて之を兼有す。花竹の師は滕昌祐，鳥雀の師は刁光，山水の師は李昇，鶴の師は薛稷，龍の師は孫遇」とあり，鶴は薛稷を受け継ぐと明記する。

そして御府所蔵の黄筌絵画のリストを記載する中には，「竹鶴図三」「六鶴図二」「双鶴図一」「独鶴図一」「翎を梳く鶴図一」「紅蕉下水鶴図二」「老鶴図一」「薛稷の双鶴を写せる図一」などがあり，徽宗が黄筌を手本としたことは確実だろう。

ここで注意すべきは，黄筌のえがいた多くの鶴図が，かなり濃厚な道教的気分のなかで生ま

れたということである。たとえば，黄が待詔としてつかえた王衍は，『旧五代史』王衍伝によれば，「（咸康元年，925）秋九月，衍は其の母の徐妃を奉じて同に青城山に遊び，上清宮に駐す。時に宮人は皆な道服を衣，金の蓮花の冠を頂き，衣には雲霞を画き，之を望めば神仙の如し」などとある。また後につかえた孟昶は，『新五代史』孟昶伝によれば，「昶は毬を打ち馬を走らすを好み，又た方士房中の術を為し，多く良家の子を採り以って後宮に充つ」などとある。

さて，ここからは，黄筌の鶴画の師匠たる唐の薛稷（649－713）について検討したい。唐の張彦遠の『歴代名画記』巻九「唐朝上」にはいう，

> 薛稷，字は嗣通，河東汾陰の人。道衡の曾孫，元超の従子。詞学もて家に名あり，軒冕代を継ぐ。景龍の末，諫議大夫，昭文館学士と為る。才藻多く，書画に工みなり。薛稷の外祖たる魏文貞公（魏徴）は，書画を富有し，虞（世南）・褚（遂良）の手写せる表疏多し。稷は鋭意模学し，窮年（一年中）倦むを忘る。睿宗が藩（東宮）に在りしとき，特に引遇せられ，黄門中書侍郎，礼・工の二尚書を拝す。先天元年，官は銀青光禄大夫，太子少保に至り，晋国公に封ぜらる。竇懐貞は之（かれ）を累（巻き添えに）し，（万年県の獄中に死を賜う），年六十九。尤も花鳥人物雑画を善くす。画鶴は名を知られ，屏風六扇の鶴様（六つ折れ屏風の画鶴のスタイル）は，稷自り始まる也。

とくにその「画鶴」については，唐の封演の『封氏聞見記』巻五「図画」にいう，

> 則天朝に，薛稷も亦た画を善くす。今尚書省の側らの考功員外郎庁には稷の画ける鶴有り，宋之問は賛を為す。工部尚書庁には稷の画ける樹石有り，東京（洛陽）尚書（尚善）坊（東南隅）の岐王（範）の宅にも亦た稷の画ける鶴有り，皆な精絶と称す。稷は位は太子少保に至る。

ここでいう宋之問の「賛」とは，かれの「省壁に画かれし鶴を詠ず」（『全唐詩』巻五十三）る詩だろう。それをあげれば，

> 粉壁圖仙鶴　粉壁に仙鶴を図し
> 昂藏眞氣多　昂蔵（ひときわ抜群のさま）として真気多し
> 騫飛竟不去　騫飛（軽く飛び上る）するも竟に去らず
> 當是戀恩波　当に是れ恩波を恋うるべし

また先の「鶴画」にも引かれた杜甫の，宝応元年（762）四川の通泉県での作「通泉県の署屋の壁後の薛少保の画ける鶴」（『九家注杜詩』巻九）の詩をあげれば，

薛公十一鶴　薛公の十一鶴
皆寫青田眞　皆な青田の真を写(えが)く
畫色久欲盡　画色は久しゅうして尽きんと欲するも
蒼然猶出塵　蒼然として猶お塵を出ず
低昂各有意　低(た)れるも昂(あ)げるも各おの意有り
磊落如長人　磊落（抜きんでたさま）たること長人の如し
佳此志氣遠　此の志気の遠きを佳しとす
豈惟粉墨新　豈(あ)に惟(た)だ粉墨の新たなるのみならんや
萬里不以力　万里（に翔ける勢いは）　力（筆力）を以ってせず
群遊森會神　群遊　森として神を会す
威遲白鳳態　威遅（鷹揚なさま）たり　白鳳の態
非是倉鵰鄰　是れ倉鵰（朝鮮うぐいす）の隣には非ず
高堂未傾覆　高堂（県署）は未まだ傾覆せず
常得慰嘉賓　常に（この壁画で）嘉賓を慰むるを得たり
曝露墻壁外　墻壁の外に曝露し
終嗟風雨頻　終には風雨の頻(しき)りなるを嗟(なげ)く
赤霄有眞骨　赤霄（真っ赤な夕焼けの空）に真骨（まことの鶴）有り
恥飲洿池津　洿池（たまり水の池）の津に飲むを恥ず
冥冥任所往　冥冥（奥深いさま）として往く所に任せ
脱略誰能馴　脱略（衆鳥など気にしないさま）として誰か能く馴(な)らさん

「赤霄」「恥飲」の一聯は，王子年の『拾遺記』の「周の昭王の時，塗修国は丹鶴を献じ，溶渓の水に飲ましむ」を引く注があり，道教の気分がある。なお，杜甫は同時の作「薛稷少保の書画せる壁を観る」(『九家注杜詩』巻九）詩でも，薛の「書画」をうたっている。

ここでまた『宣和画譜』巻十五「花鳥一」の「薛稷」の条を見てみると，薛の鶴図の隔絶を論じていう，

且つ世の鶴を養う者は多し。其の飛鳴飲啄の態度は，宜しく之を得て詳と為すべし。然るに鶴を画くに精なる者有ること少なし。凡そ頂(いただき)の浅深，氅(はね)の黶淡，喙(くちば)しの長短，脛(すね)の細大，膝の高下，未まだ嘗つて一一能く写生する者有るを見ざる也。又た其の雌雄を別ち，其の南北を辨(わか)つに至りては，尤も其の難とする所なり。名手の号して画を善くすと為すと雖も，而るも鶴を画くに托爪を以って地を傅(う)つは，亦た其の失也。故に稷の此れに於けるや，頗る其の妙を極む。宜しく名を古今に得べし。

そして御府所蔵の薛稷の画として，「苔を啄む鶴図一」「歩みを顧みる鶴図一」「鶴図五」を記載する。薛の鶴図もやはり徽宗の鑑賞し手本とするものだったろう。

さて，さきの黄筌と同じく，薛稷の鶴図も道教的気分のなかで生まれたものであることは，注意しなければならない。かれが画家として活躍したのは「則天朝」，つまり則天武后の治世（684－704）である。武后が道教に心酔していたことは有名で，久視元年（700）には胡昭を派遣し嵩山の峻極峰で金簡を投じさせたが，その文は「大周国主武曌は，真道を好楽し，長生神仙ならん。謹んで中岳嵩高山門に金簡一通を投じ，三官九府が武曌の罪名を除かんことを乞う」とあった。

そしてより注意すべきは，彼女の道教は鶴の感応と深く結びついていることである。たとえば聖暦二年（699），控鶴府の官員を置き，お気に入りの張易之・昌宗の兄弟を控鶴監とし，鳳閣舎人の薛稷らを控鶴内供奉としたり，鶴に騎って昇仙した周の仙人王子晋を顕彰する「升仙太子の碑」を自制して嵩山に立てたりした。それにあわせて，おいの武三思が「仙鶴篇」（『全唐詩』巻八十）の連作をつくり寿いだが，そこには「九皐に独り唳（な）きて方（まさ）に清切たり，五里群を驚かせて俄かに断絶す。月下に行を分かつは度（わた）る雲に似，風前に影を颺（あ）ぐるは廻る雪かと疑う」「風前月下　路漫漫，水に宿り雲に翔り去ること幾般ぞ。宛転して能く呉国の市を傾け，裴回して巧みに漢皇の壇を払う」といった詩もある。

6

最後に，北宋の末期という今から九百年ほど前に起こったこの瑞鶴のような吉祥が，それは真実とはにわかに信じがたいものだが，二十世紀の中国にも起こったということを述べよう。

季羨林（1911－2009，字は希逋，山東臨清の人）といえば，有名なインド学，サンスクリット研究の権威であり，長年にわたって北京大学教授をつとめた人物だが，そのかれが若いころ，北京の清華大学西洋文学系の学生だったときにつけていた日記，『清華園日記』（外語教学与研究出版社，2009年12月）の民国二十二年（1933）四月二十四日には，おもしろい記述がある。

> 昼ごはんを食べてから出かけ，歩きながら遊んでいたら，突然王紅豆（王岷源，1913－2000，のち北京大学英語系教授）が言った，「おれは城内の太廟にたくさんの鶴が飛んで来たと人がいうのを聞いた。これは本当に奇跡だ。見にいこうぜ」。そこでわれら三人，私・武・王は人力車に乗っていった。もう二時だったが，到着すると，はたしてたくさんの鶴がいた。それらは灰鶴とよばれていて，みな太廟の南側の松の上に巣を作っていた。毎年きまった時期に来て去るそうだ。鳴き声は甲高く，時には雲のあたりを旋回するのも，奇観である。鶴よりすこし小さい。
>
> それから市場にいった。私はチャールズ・ラム全集の一冊を買ったが，1867年版で，大い

に満足した。七時に学校に帰った。

「太廟」は，北京の紫禁城の南東側にあり，明清二代の皇帝が祖先を祭る場所だった。黄瑠璃瓦の広壮な三大殿のうち，最も大きな前殿の両側には配殿があり，東配殿は歴代の功績ある皇族の位牌をまつり，西配殿は異姓の功臣の位牌をまつる。前殿の背後には中殿・後殿がある。民国十三年（1924）からは和平公園となり，1950年からは労働人民文化宮と呼ばれる。季氏たち学生が居住する清華大学は城外の西北郊にあり，そこから太廟まではかなり遠く，人力車でも時間がかかったはずである。これは北京でおこったことで，河南省の開封とはかなり離れているが，同じく首都であり，徽宗に起こった感応も，案外，こんなことだったかもしれない。